

分 類	2 — 3 初期消火要領
目 的	<p>火災は発生後出来るだけ早く、消火作業をすることが肝要である。しかしながら、状況を的確に判断し、どのような手順で、何をすべきかをよく理解して、対応できるようにあらかじめ訓練しておく必要がある。</p> <p>地震による火災においては、まず自分の身の安全を確保し、その後消火活動をするわけだが、自分でどのように、どこまでできるのか。また、身の回りにある消火に使えるなものを使ってどのような消火方法があるかなど、応用力と瞬時の判断が求められる。</p> <p>火災は、時間との勝負である。漠然とした消火の知識にとどめず、訓練を重ねる中ではじめて分かることが多い。自ら体験（訓練）を重ねることで、他人にも的確に指導できるようにしておくことが大事である。</p>
主な内容例	<ol style="list-style-type: none"> 1 火災の特徴を知る。（発生の時間帯、季節天候、木造家屋、マンション、一酸化炭素中毒の恐れ） 2 発生の場所とその原因をつかむ（台所、煙草不始末、配線のショート、通電火災など） 3 自分が何をすべきか、出来るか（大声で知らせる、119番通報、自身で消火などの優先順を決める） 4 消火器の特徴とその使用方法を熟知し訓練する 消火器としては、ポータブル・一般の消火器・屋内消火栓・スタンドパイプ・可搬式消火ポンプなど、居住スタイルにより機材が異なる 5 消火器の場所を予め確認しておく。（マンションならば階段付近、屋外の道路沿いに設置されている街角消火器もある） 6 いざという場合に備え、避難経路を確認し、実際に歩いてみる 7 地域や建物（戸建住宅、マンション）の違いによって訓練のアクセントを変える 8 器具等は実際に使ってみた体験、訓練の場合にはうまくいかなかったことを盛り込むと単なる知識（トリセツ）を越えた「要領」になる
参 考 資 料	<ul style="list-style-type: none"> ・防災士教本（2019年版）P43～45万、228～234 ・東京防災 P18、46、78、188